

JFS/CEFR に基づくレベル認定試験(A1)の開発

熊野七絵 (国際交流基金マドリッド日本文化センター)・伊藤秀明 (国際交流基金ケルン日本文化会館)・
蜂須賀真希子 (国際交流基金パリ日本文化会館)

1. 背景と目的

欧州言語をはじめとした公的な言語能力試験は CEFR に準じたレベル設定や課題を採用した試験に移行しつつあり、CEFR に基づく試験開発マニュアル “Manual for Language Test Development and Examining” (ALTE 2011) も公表されている。また、各国で教育段階や教育機関種別に言語間で共通する試験作成基準が設けられ、各教育機関におけるレベル認定試験も行われるようになってきている。

そのため、日本語についても同様の試験作成が求められ、学習者からも CEFR レベルに準拠した能力証明のニーズも高まっている。一方、教師からは、試験作成における日本語の文字の扱いなどが課題として指摘されている。

発表者の所属先である国際交流基金の欧州 3 拠点では、JF 日本語教育スタンダード (以下、JFS) に基づく様々なレベルの日本語講座 (以下、JFS 講座) を開講している。2011 年度より、A1 レベルについては JFS に基づいて開発された教材『まるごと 日本のことばと文化 入門 A1 試用版』(以下、『まるごと』) を使用している。現在、その評価はポートフォリオや学期末の達成度テストなどで行っており、拠点間で共通するレベル認定試験は実施されていない。そこで、JFS/CEFR に基づく共通レベル認定試験(A1)を欧州 3 拠点共同で開発することとした。

2. 試験作成

試験作成にあたり、まず、スペイン語、ドイツ語、フランス語の公的言語能力試験や各国で開発された CEFR 準拠の試験作成基準、日本語の試験問題等を収集し、どのような構成、課題、設問で作成されているかを分析、検討した。

そして、既述の試験開発マニュアルのサイ

クルに従い、Planning(計画)→Design(デザイン)→Try-out (実施) の段階を踏み、試験の作成は、Test specifications (試験基準の設定)、Assembling test (試験素材・問題作成、質の調整、全体の調整と構成)、Live test material (実施用試験問題の作成) の順に行った。

表 1 に作成したレベル認定試験 (A1) の全体構成を示す。試験の全体構成や設問形式などは他言語の言語能力試験と共通するものとした。また、課題の設定は JFS/CEFR の Can-do (能力記述文) を参考に、A1 レベルに合った実生活の課題とした。そして、トピック、課題の難易度、文型や語彙などの学習項目、表記の扱いは『まるごと』を基準とした。

表 1 レベル認定試験 (A1) の全体構成

	時間	課題	設問	配点
読解	50 分	6	23 問	25 点
聴解	20 分	5	23 問	25 点
作文	25 分	3	3 問	25 点
会話	15 分	3	3 問	25 点

3. 結果と考察

CEFR に準拠した他言語や日本語の試験例を分析する中で、受容、産出、やりとりなどの言語活動を中心とした試験構成や課題の設定、設問形式に多くの共通点が見られることがわかった。また、本試験の開発により、その共通点は日本語の試験作成にも応用可能であることを示すことができた。一方、試験問題を作成する上での日本語表記や学習項目の範囲設定の問題についても、『まるごと』を拠り所にすることで解決の方向性を示すことができた。今後は、JFS 講座での試用と評価を重ね、試験問題や実施体制を改善し、レベル認定試験としての質を高めていきたい。